

## 『息子』

アルトウール・シュニッツラー

春日正男訳

私は夜中の十二時にまだ机の前に座っている。あの不幸な女性のことを考えると落着けないのだ……私は古臭い絵の掛っているあの裏庭に面した陰気な部屋を、血で赤く染まった枕のあるベッドを、その枕の上の眼を半ば閉じた蒼ざめた顔のことを考えている。その上その日はどんよりとした雨模様の朝だった。ベッドと反対側の部屋の隅にある椅子に、足を組み反抗的な顔をして、彼が、あの不幸な男、母親の頭に手斧を振り降した息子が座ってた……そうなのだ、そのような人間がいるものなのだ。そしてそのような人間達は必ずしも気が狂っているとはいえないのだ！ 私は息子の反抗的な顔をつくづくと見た。その表情を読み取るうとした。悪意のある蒼白い顔だった。醜くはなく愚かそうでもなかった。唇には血の気がなく、陰鬱な眼付きで、しわくちゃのシャツの襟の中に顎を埋め、襟元にはリボンタイが揺れていたが、その一方の端を細い指先にくるくるとからませていた。——そうやって彼は自分を連れて行く警察が来るのを待っていた。警察が来るまで、誰かがドアの外に見張りとして立っていた。私は不幸な母親のこめかみに包帯を巻いた。その哀れな女は意識不明だった。近所のとある女性が彼女の世話をかって出たので私は患者のもとから立ち去った。階段の途中で母親殺しの犯人を連れに来た地方警察官と出会った。郊外にあるこのアパートの住民達はひどく興奮していた。彼等は各々のドアの前に集まって、この悲しい事件のことを話していた。

幾人かの人から、上の階はどうなっているのか、怪我人の生命は大丈夫なのかと聞かれた。私ははっきりした返事は出来なかった。

かつて往診したことのある下級公務員の妻で、もうとても若いとはいえない顔見知りの女が、私をしばらくの間引き止めた。彼女は階段の手摺にもたれて、完全に打ちひしがれているようだった。「先生、これはあなたがお考えになつていらっしゃるよりもずっと恐ろしいことですよ！」と彼女は首を振りながら言った。——「ずっと恐ろしいことですよって」私は聞いた。——「そうですね、先生——彼女が彼をどれほど愛していたかを御存知でいらっしゃるならば！」——「愛していたのですって」——「そうですね、彼女は彼をとっても愛していて、甘やかしていました。——「あんな男を！でもどうして」——「ええ、どうしてかしら！……ねえ先生、あの若者は子供の時からずっと不良でした。でも彼女は、彼がすることを全部大目に見ていました……とても悪い行為まで許していました……アパートの私達は彼女にしばしば言わずにはいられませんでした。あの穀潰しは子供の時からもう酔払っていました。もっと大きくなってからは……あの事件が！」——「どんな事件ですか」——「ほんの短い間彼はある店で働いていました。けれどもその勤めをやめなければならなかったのです！」——「やめなければならなかったのですか」——「そうですね。彼はありとあらゆる馬鹿化たことをしでかしました。そのうえ店の主人のものまで盗んでしまったのです……母親はそのお金を弁償しました。ほとんど自分自身の生計をたてることもままならなかったあのひとが！」——「いったい彼女はどんな仕事をしているのですか」

「縫い物や刺繍をしていました。それはそれは本当に切り詰めた暮し振りでした。ところがあの若者は母親を助けるどころか、彼女が稼いだ微々たるものを彼女から奪って飲み屋とか、もっと悪い所へ持ったのです。でもそれだけでは済みませんでした。食器類、二・三枚の絵、壁掛け時計、その他釘付けされていないものはほとんどすべて質屋へ持って行ったのです……！」

「それで彼女はそれを我慢していたのですか」

「我慢していたですって！——彼女は彼をいつもとても愛していました。私達は誰もそのことを分っていませんでした……そして彼はお金を欲しがるようになりました……彼女は持っていたものをみんな彼に与えたのです……彼は金を持っていなくちゃならないんだと彼女を脅しました！」

「どうしてあなたはそれらのことを全部知っているのですか」

「アパートの人はみんな知っていますわ。彼の叫び声は吹き抜けになっている階段を通して聞えるのです。夜でも昼でも酔って帰って来ると、もう表玄関のところまで文句を言い始め罵り始めるのです。あの哀れなひとはいろいろな所に借金をしていました。あの上の階では時々パンさえありませんでした……アパートの私達は時々彼女を助けたこともあります。私達にはお金持ちはひとりもいませんけれど。でも事態は更に悪くなりました。彼女は息子に対して完全に盲目になっているようでした。彼女はすべてを若気の至りと思っていました。あいつが夜中に階段を千鳥足で歩き騒ぎ立てる時には、彼女は私達に許しを乞うこともありました。そうなんです。そんな息子だったので、先生——そしてとうとうこんなことになってしまいました……」今や彼女は私に今度の事件の全容を話し始めた。「彼は今朝早くようやく帰って来ました。私共のドアの前の階段で彼が転ぶのが聞えました。その時彼はしゃがれた声で何か歌っていました。さてそれから上の階の部屋で、彼はまたお金をせびったようです。ドアは開けられたままになっていましたから——私共の階まで聞えました……ねえ先生、五階から三階まで——彼の騒ぐ音が聞えたのです。それから突然叫び声がありました。もう一度叫び声が。みんなは段階を駆け上がりました。そしてその事件を見たのです。彼は全くかたくなにその場に立っていて、肩をすくめていたそうです……！」

私はその場を後にした。背後から重々しい足音が聞えた。母親殺しの犯人が連れて行かれるのだ。廊下には男達が立っていた。女子供は男達の背後から見ていた。口をきく者はひとりもいなかった。私は階段の踊り場の所で振り返

った。階段を降り、アパートから外へ出て、とても沈んだ気持でその日のうちにしなければならぬ仕事に取りかかった。正午少し過ぎに私はその不幸な事件のあったアパートへ引き返した。怪我人は私が立ち去った時と同じように意識不明で、呼吸はかなり苦しそうだ。付き添い看護の女性が、私のいない間に殺人委員会の人が来て調書を取って行ったと話してくれた。部屋の中はとても暗かったので、私は蠟燭に火を付けさせベッドの頭の方にあるナイトテーブルの上に立てさせた……何という無限の苦悩がこの瀕死の女の顔に刻み込まれているのであろう……私は患者に声をかけた。彼女は僅かに身動きし、呻き、ほんの少し眼を開けた。話すことは出来なかった。私は必要なことを言い付けてから立ち去った……夕方その階に上がって行った時、その哀れな女は幾分か良くなっているように見えた。具合はどうかと尋ねると「少し良いようです……」と答え微笑もうとした。しかしすぐにまた意識不明に陥ってしまった。

午前六時に！——

真夜中過ぎ——私が日記に最後の行を書き終えた丁度その時——激しく呼鈴が鳴った。マルタ・エーバーライン夫人——これがあの深傷を負った女性の名前であった——が私に会いたがっているのだ。アパートに住んでいるひとりの少年が使いに出された。私にすぐ来て欲しいと。すぐに、すぐに……熱があるのだろうか。死にそうなのだろうか……少年は何も知らなかった。ともかく緊急の事態なのだ。

私は外科の鞆を持って少年について行った。私がアパートの階段を急いで上る間、少年は階下に立ち長蠟燭を手に持って私の足元を照らしていた。階段の上の方の段はずっと暗くなっていたが、踊り場の所では鈍いちらちらする明かりが私を背後から照らしていた。しかし患者の部屋の半ば開いているドアからは、一条の光が私の方に向かって洩れていた。玄関に入り、台所と兼用になっている小部屋を通過して、裏庭に面している部屋へと入った。付き添い看護の

女性は私の足音を聞いた時にはもう立ち上っていて、私を出迎えた。「どうしたのですか」私は囁いた……「どうしてもあなたとお話ししたいのだそうです。先生」彼女は言った。

私はすぐにベッドの傍に行った。患者は身動きもせずベッドに横になっていた。眼は大きく見開られていた。彼女は私を見た。低い声で彼女は言った。「ありがとう、先生、ありがとう！」——私は彼女の手を取った。脈は特に弱くはなかった。私は、我々医者がたとえそういう気持になれない時でも、いつでも言えるように喉の中に持っているなければならない快活な声で言った。「そう、良くなっているようですね、エーバーラインさん、とてもうれしいことです！」

彼女は微笑した。「ええ、良くなって——あなたにお話ししなくてはならないことがございます……」

「そうですか」私は言った——「お聞かせ下さい」

「あなたにだけ！」

「しばらく休んでいて下さい！」私は付き添い看護の女性の方を向いて言った。

「外に出ていて頂戴！」患者は言った。

付き添い看護の女性はいぶかし気に私を見てから、ドアを静かに後手に閉めて出て行った。私は患者とふたりだけになった。

「どうぞ」と患者は言って、ベッドの足の方にある椅子を眼で示した。私は彼女の手を握りながら腰を降し、彼女の声をもっと良く聞えるようにと椅子を近付けた。

彼女はかなり低い声で話した。「こんな時間にお呼び立て致しまして申し訳ございません、先生」彼女は話し始めた——「けれどもどうしてもあなたにお話ししなければならぬことがございましたの！」

「どうして欲しいのですか」私は聞いた……「ただあまりお疲れにならないように」

「ああ、いいえ……一言三言で済むことですわ……あなたは彼を助けなければいけません、先生！」

「誰を」

「私の息子を——彼をです」

「ねえ、エーバーラインさん」私は同情に満ちて言った……「あなたも良く御存知でしょうが、それは私の力ではどうにもなりません！」

「ああ、あなたにだったら出来るはずですが、もし正義があるなら……」

「あなたに切にお願いしますが……興奮しないで下さい……あなたが私を友人と違って下さることはうれしく思いますし感謝もしています。しかし私はあなたの医者で、あなたに少しばかり命令することも出来るのですよ。そうではありませんか——ではお休みなさい。何よりもまず休むことです！」

「休めと……」彼女は私の言葉を繰り返し、眼と口が苦痛に歪んだ……「先生、あなたは私の話しを聞いて下さらなくてはいけません……私の心に重い石のようのにし掛っていることなのです」

黙ったままにいる私の顔を見て、彼女はそれが話さないという催促と思ったのだらう。私の手をしっかりと胸に押し当てたまま話し始めた。

「彼は無罪です——もしくは少なくともみんなが思っているほどには罪はないのです。私は悪い惨めな母親でした……」

「あなたが」

「ええ、私です……私こそ犯罪者なのです」

「エーバーラインさん！」

「すぐにお判りになりますわ……私はエーバーライン夫人ではございません……私は未婚のマルタ・エーバーライ

ンなのです……私はただ末亡人と思われていただけなのです……私は人を欺く為には何ひとつしては来ませんでした。けれどもこの昔の事件のことは誰にも話せませんでした……」

「しかし、ねえ……今日はその事でもそんなにお苦しみになってはいけません！」

「おお、そうではないのです！ 私が捨てられたのはもう二十年も前のことなのです……彼が生まれる前に、私とあの人の息子が生まれる前に私は捨てられたのです。そして……彼が生きているのは、実際単なる偶然にすぎないのです。何故なら、先生……私は彼が生まれたその晩に、殺そうとしたからなのです……ほら、そんな目で私を御覧になりますでしょう……ひとりぼっちで絶望して私は立っていました……けれども私は自己弁護をするつもりはございません……私は毛布とシーツを手に持って、それを彼の上に被せました。窒息すると考えたのです……そして翌朝早く恐る恐る覆いを取り除きました……すると彼は呻き声をあげたのです！ そうです、彼は呻き声をあげました——そして息をしていました——生きていたのです！」彼女は泣いた、この不幸な女は。私はひと言も言葉が出なかった。彼女はしばらく黙ってからまた話し始めた。

「……彼は眼を開いて私を見て断え間なく呻き声をあげました。私はといえば、生後一日と経っていない子供の前でもがたがたと全身が震えずにはいられませんでした……今でもはっきりと憶えています。多分一時間くらい私は子供を見て考えていました。何という非難がこの眼の中にあるのだろう。多分この子は私の気持を分かっていて告発しているのだ。多分この子は今日のことを憶えていて、私をいつまでもいつまでも告発し続けるだろうと。子供は大きくなっていきました——そして子供の大きな眼の中にはいつも同じ非難の色がありました。子供が両手を私の顔の方に伸ばして来ると私はこう考えました。そうだ……この子は私を引っ掻くつもりなのだ。復讐するつもりなのだ。何故ならこの子は私が毛布の下で窒息させようとしたあの生まれたばかりの最初の夜のことを憶えているのだから……！——彼は片言を話し始めました。私は彼が本当に話せるようになる日を恐れました。けれどもその日はゆっくりとやって

来ました——とてもゆっくりと。——そして私はいつも待っていたのです——今こそ彼は言うでしょうと。そうです、そうです、彼はこう言うでしょう。『俺は騙されはしない。お前が俺にどれほどのキスをして、どれほど愛撫をして、どれほど愛情を注いでも、それらのことがお前を決して本当の母親にすることは出来ないのだ』と。彼はキスされることを拒みました。彼は乱暴でした。彼は私を愛していませんでした……私は五才の子供にぶたれました。それ以降もぶたれましたが、私は微笑していました……私は罪を償うという恐ろしいほどの憧憬を抱いていました。しかし私はまたそれが絶対に不可能だということも良く知っていました！　いつか私は罪を償うことが出来るでしょうか……そして彼が私を見る時、彼はいつもあの恐ろしい眼付きをしていました……！　彼が大きくなり学校に通うようになった時、彼が私の心を見抜いていることがはっきりと判りました……私は後悔しながらすべてを耐えました……ああ、彼は良い子ではありませんでした……けれども……私は彼を叱ることは出来ませんでした！　叱るですって！　おお、私は彼を愛していました。気が狂うほどに愛していました……幾度も私は彼の前に跪き、彼の手にキスをしました——彼の膝に——彼の足に！　おお、彼は私を許しませんでした——愛情のこもった眼差しもなく、優しい微笑もありませんでした……！　彼は一〇才になり、一二才になりました。彼は私を憎んでいました！——学校で彼は悪いことばかりしていました……ある日彼は学校から帰って来て、反抗的な口調でこう言いました。『学校はもう終りだ。あいつ等は俺を学校から追い出したのだ……』『おお、その時どれほど私は祈ったことでしょうか。私は手に職を覚えさせようと思いました——頼み、懇願しました——彼はかたくなでした——彼は仕事のことは何ひとつ知りたがりませんでした。彼はぶらぶらしていました……彼に何か言うことが出来たでしょうか——彼の眼差しのひとつが私のすべての勇気を否定しました……彼が私に面と向って『かあさん、かあさん、お前は俺に対してどんな権利も持ってはいないのだぞ』と言うであろう日をどれほど恐れたことでしょうか。——けれども彼はそんなことは言いませんでした……時折彼が酔って帰って来た時、私は考えました。今こそ酔いが彼の舌を解きほぐすだろうと……け



れどもそのようなことは起りませんでした……そのような時彼は時々倒れてしまい、明るい真昼まで床に横になっていました。それから目を醒まし、傍に私が座っていると嘲りを込めて私を見ました……唇のまわりにすべてを知っているぞといわんばかりの薄笑いを浮べて。それはまるで俺達がどんな状況にいるのかちゃんと知っているぞといったげな薄笑いでした……！　そして彼はお金を必要としました。たくさんのお金を。私はそれを工面しなくてはなりませんでした……けれどもいつも彼が望んでいるようになるとは限りませんでした。すると彼は怒りました。ひどく怒りました——しばしば彼は私に手をあげました……そして私が疲れてベッドに沈み込むと、彼はまたしても嘲りの薄笑いを浮かべて私の前に立ちました。その薄笑いは、いや、苦痛を奪い取ってしまうとどめの一撃を俺は決してお前に与えはしないぞ、とっていました……今朝ついに——彼はどたばた騒ぎながら階段を上って来ました——『金だ！　金をよこせ！』——ねえ、お願いよ、一銭もないのよ！——『何だと、一銭もないだと』——私は来週末で待つように頼みました。明日まで、今晚まで！　無駄でした！　私は彼にお金をやらねばならなかったのです——私はそれを隠していました——彼は叫び声をあげて探しました。筆筒の引出しを開け、そしてベッドを……悪態をつき……それから……それから……」

彼女は言葉を切った。少したってから彼女は言った。「それは彼の権利ではなかったでしょうか」

「いいえ」私は言った……「いいえ、エーバーラインさん！……あなたはとくに罪を償っておいでです。あなたの限らない善良さは、狂気があなたを捉えた一瞬の混乱をとくに償っておいでですよ……」

「違います、先生！」彼女は答えた——「狂気ではないのです！　私はあの夜のことをはっきりと憶えているのですから……私は狂ってはいませんでした。自分が何をしようとしていたのかを良く知っていました……ですから、先生、法廷に出て下さい。そしてここで私から聞いたことを話して下さい。彼は釈放されるでしょう。釈放されなければいけませんわ……！」

私はこの場で彼女に抵抗するのは難しいと思った。「さあ」——私は言った——「明日またこのことについて話しましょう。エーバーラインさん——今日のところは、あなたには休息が必要です……あまりにも真剣に話し過ぎましたから……!」

彼女は首を振った。

「先生!——瀕死の者の願いは神聖ですわ……あなたは私に約束して下さいさなくてははいけませんわ!」

「あなたは死にませんよ——あなたは回復しますよ」

「私は死にますわ——何故なら私は死を望んでいるのですから……法廷に出て下さいませ……」

「何よりもまず私の言うことを聞いて下さい。いいですか、私はあなたの医者なのです! 私はあなたに命令します。お黙りなさい。そしてお休みなさい」——

こう言って私は立ち上がり、付き添い看護の女性を部屋に呼び入れた。しかしエーバーライン夫人は私が別れ際に差し出した手を離さなかった。——ひとつの問いが彼女の眼の中で燃えていた。

「わかりました!」私は言った。

「ありがとうございます!」彼女は答えた。それから私は付き添い看護の女性に二言三言必要な指図をしてから、明朝真先にまた来ようと決意して立ち去った……

翌朝私が訪れた時患者は意識不明だった。正午に彼女は死んだ……彼女の秘密はまだ私の中に、この書類の中に隠されている。彼女の最後の願いを適えるのも適えないのも私の自由なのだ。私が法廷に出ようが出まいが——それはこの不幸な母親の惨めな息子にとっては同じことなのだ! 世の中にはこの母親の錯誤を、息子の死に値する犯罪の情状とみなす裁判官はいないであろう。息子の眼の中に、永遠の非難とあの恐ろしい夜のことに対する変ることのない記憶を読み取らずにはいられなかった妄想こそが、この不幸な母親にとっては有り余るほどの償いだったのだ。

あるいはこういふようなことが有り得るであろうか。生まれたばかりの最初の数時間についてのものはや明確に示すことは出来ないが、さりとて跡形も無く消え失せてしまうこともない曖昧な記憶といったものが、私達の中に残るといふことが。——おそらく窓を通して差し込んで来る陽の光が、平安な感情の本源的な原因ではないのか——そして母親の最初の眼差しが私達を尽きることのない愛情で包んでくれる時には、その母親の眼差しは子供の碧い眼の中で、甘味にかつ忘れ難く輝き放つのではないだろうか——しかし母親のこの最初の眼差しが絶望と憎悪の眼差しである時には、その眼差しは、無数の様々な印象を受け取る子供の心の中で、その子供の心がそれらの印象を解明することが出来るずっと前に、破壊的な力で燃え上がるものではないだろうか。そして生まれたばかりの夜を恐ろしい本能的な死の不安の中で過した子供の感覚世界の中では、一体どのようなことが起っているのだろうか。人間はまだ一度として自分の生まれたばかりの最初の数時間のことについて報告し得たことはないのだ——だからあなたの方のうちの誰ひとりとして——と、こう私は裁判官達に言えるのだが——人間が心の内に抱いている善と悪は、生まれたばかりの最初の空気の息吹、最初の陽の光、母親の最初の眼差しのおかげであるかということを知らないのかも知れないのです！——私は法廷に出よう。今私は決心した。何故なら私には、私達が望めることがどれほど僅かのものであったとしても、いかに多くのことをしなくてはならないかということがまだはっきりとはわかっていないように思われるからである。

底本には Arthur Schnitzler Gesammelte Werke Die Erzählenden Schriften Erster Band S. Fischer Verlag 1970  
を使用しました。